

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
3月号
通巻607号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



ヤブツバキの落花 (旧丹生川上神社境内)

井手泉さん撮影

再録 昭和41(1966)年6月23日発行『大倭新聞』第22号より

対談 日本とはなにか 〈上〉 後編

鶴見俊輔氏(43歳)×法主 矢追日聖(54歳)

和合思想の原型
～大和維新から明治維新へ～

編集部(柴地則之・24歳) ひとつ、前から感じてることがあります。『日本書紀』の中に、神武天皇が九州から大和へやって来て戦争を始め、後に大和を治めてゆく過程が描かれていますね。金鶏(きんこ)発祥についてはよくわかりませんが、大和維新って言うんですか。

法主 いや、そんな名称ないでしょう。私が勝手にそう呼んでるだけで。

編集部 そこで見られる九州勢と大和勢の和合の型が、日本の集団を組み立てる際の原型のように思えるんです。鶴見先生が2年ほど前に言われた「※大本の結婚の儀式から非常に学ぶことがある」という指摘と結び付いたんですけど。(※1…出口なお・出口王仁三郎を「大教祖」とする神道系新宗教「大本」の神前結婚式。『古事記』国産の神話のイザナギ・イザナミになり、新郎新婦が途中左右に交差して位置を入れ替えるといった独特の作法に基づく)

大和維新は、九州から来た神武天皇に対して、大和(おほやまと)を立てる、というやり方でした。表向きは新王の神武天皇を立てて、実効支配してゆく力は、大和側が握る。お互いに納得できて争いが無い。集団同士のそういう組み合わせ方が日本の伝統的な原型じゃないか。

この原型は明治維新でも生きていますし、宗教史で言えば、鶴見先生が指摘された大本の結婚の儀式にも表れているか

もしれないと思っただけです。

両方をうまく立てながら、二つの違ったものを一本に合わせるべくやり方がある。それは日本人特有の感覚から自然に出てくるのかどうか。

左翼流に言えば、野合だとか、徹底していい、とか、そういうやり方でしょう。ですが、犠牲を抑えて、両方の主張をすり合わせられるやり方としては非常にいいものだと感じます。

むろん、集団を組織する型として完璧である、オールマイティだとまでは言えません。相対する一方を立てるか、両方を立てるか、どちらにも言い分はあるはずですが。しかし、協調してやっつけていこうとしたら、今言ったとおり、大和維新という事例の中に、その原型が既に見取れるのではないだろうか。そういうやり方は明治維新まで続いたのに、明治維新の後になると、失われてしまったような気がします。

法主 『日本書紀』の「神武紀」など、うまく書いてありますね。歴史、学問の世界では否定されるけど、言い伝えにしろ、今から千二百年前の記録としていちおう残ってるんですから。

神武天皇が九州から大和へ出て来てどうなったこうなつたと書いてあるような事が、歴史上の事実であろうとなかろうと、古代の日本人の心の中に、ああした言い伝えが生きていたってことは否定できないんです。否定しようにも否定する根拠がないし、肯定しようにも肯定する根拠がない。そういう意味で『日本書紀』に書いてあることを認めてもいいじゃないか、と思います。ただ、あ

の話はどうもうまくできすぎますね。

編集部 事実、ああであったかどうかは……。法主 けどまあ、霊界を見てると、神武天皇というのは確かにありますけどね(笑)。

金鶏祥祥の話もうまくできています。日本人の

心の表れと言ってもいいんじゃないかな。それについては「長曾根の大君」『大倭新聞』第5号に掲載)という題の文章を書いたことがあります。

明治が落としたもの

編集部 先生は「神武紀」みたいな話を、やはり日本人的な見方と考えられますか。

鶴見俊輔 ええ、そう考えますね。理論の上での対立をトコトンまで追い詰めない、不徹底な性格という面はあるかと思えます。

と同時に、無理やり追い詰めてどちらが正しいか一つ選べと迫らずに、道が二つあるところまで追い込んで、それ以上はわからない状態に置くというの、非常な知恵だとも言えます(笑)。

明治以後の合理主義者は、そういった知恵を落としたのではないか。その結果、キリスト教的、ユダヤ教的にしか考えられなくなりました。でも、自分たちの暮らしはなんでも合理的に割り切れるものではない。だから、非常に妙なことになったんじゃないですか。

だいたいね、この二、三十年のうちに、別のタイプの共産主義というのが生まれつつあるんです。

例えば、イタリアは今言った、道が二つ以上あるという形になっている。カトリックが非常に強いけれど、押し付けがましくないんですね。イタリア人は非常に暮らしを楽しんでしよう。

そのイタリアがムッソリーニ政権だった期間、ずっと牢屋に入れられていた^{※2}グラムシという人がいて、「有機的知識人」という論説を書きました。

あらゆる人の遺産を全部取り入れて、それらをバラバラに分けず、有機的に組み合わせた人間として生きよう。それが共産主義の未来になるんだと。(※2:アントニオ・グラムシ。イタリア共産

党を指導した思想家。獄中で書き続けた思索集「獄中ノート」が著名。市民社会を成立させるヘゲモニーの概念や知識人論などを通じてマルクス主義の枠組みを發展させ、戦後日本の左翼層にも注目された)

実際、ムッソリーニの支配に抵抗した人たちは、グラムシのような共産黨員だけじゃなくて、^{※3}クローチェみたいな自由主義者とか、カトリックのクリスチャンとかも一緒でした。(※3:ベネデット・クローチェ。20世紀イタリア思想界を代表する哲学者、歴史家。政治家でもあり、単一政党制に否定的な自由主義の立場から、戦中にファシズム政権を批判。ムッソリーニ退陣後、自由党の再結成に貢献した)

東欧のポーランドとかルーマニア、チェコスロバキア(当時)などにも、ソ連型の共産主義、スターリン一人の思想でくくりきれないタイプの考え方が出てきていた。だから、対立を避けて一緒にやる、そういう可能性は、微弱ながら出現しているわけですよ。どれくらい大きな動きになるかわからないですけどね。潰されちゃうかも知れないし。キューバの場合、本当に潰されましたから。キューバ革命の指導者・カストロが唱えた革命は、まさにそういう種類の社会主義でした。

強国に曲げられた夢

鶴見 革命運動前のキューバの共産党は保守的で、ゼネストとかあまりやらなくなっていた。大学生だった頃のカストロも当初は共産党と関係なく、共産主義の学習だけやってた。

その後、仲間の青年たち百数十人とともに時の権力を襲撃します。^{※4}全学連の中一番小さい集団は何ですか。^{※5}社会学よりも小さい……三百人くらい^{※6}。アントより人数が少ないわけだ。でも負けて国外へ出た後、再びキューバに戻って山の



夜中に可成り騒がしく、幽霊の吊辞を掲げた。5月9日、法主先生が古神宮に参拝した。『とおやまと』5月号に掲載された。大佐として『とおやまと』5月号に掲載された。

中へ立てこもった。そこで革命運動を支えきり、ついに勝つんですけど。(※4：全日本学生自治会総連合の略称。戦後、全国145大学の学生自治会により結成された学生運動の組織。多くの左翼運動家や団体を輩出する母体となった。※5：社会主義学生同盟の略称。後述するブントの学生組織及び全学連分裂後の一派。※6：共産主義者同盟の通称。当時の日本共産党の指導方針に反目・離脱した運動家や学生らが結成した独立系左翼組織。一時、全学連の主導権を握るほどの勢力となった)

負けた時、首謀者は皆捕まっちゃって、カストロは一度裁判にかけられました。その裁判の場で、カストロはこう誓うんですね。「もしも私たちの革命運動が成功した暁には、自分たちが殺した政府側の警察官の遺族たちも革命記念日に呼んで、共にその日を祝おう」と。

この時のカストロの革命グループは、まだ少数の若い労働者や学生の集まりですよ。それなのに負けて法廷に立たされた時、「自分たちはやがて勝つ。そして革命記念日には……」と宣言する。日本の左翼学生はそこまで言わないでしょう。「自分たちは必ず勝つ。断固粉碎。敵はケシカラ

ン」。それだけで終ります。ところが、革命に成功した後のキューバを隣国のアメリカが猛烈に弾圧して、経済封鎖した。誰も守ってくれないのでカストロはしかたなく、ソビエト圏の中へ入ってしまいます。

いったん入ってしまったと、どうしてもソビエト的な指導者、ある種のマルクス・レーニン主義者にならなければ、一元的な体制を作るわけです。私に言わせれば、アメリカのせいだけだ。

アメリカ側にカストロの初期思想をそのまま貫かせるだけの度量があったらね。キューバなんて小さな島ですよ。この島の革命がアメリカ全体を危機に陥れるなんて事態はあり得ない。

放っておけばいいのに、アメリカの資本家が政府の中で画策した。革命前はキューバの砂糖産業でいっぱいもうけられたけど、革命後はもうけを失ったから、キューバをもっといじめればカストロが倒れるだろうって宣伝したわけです。

で、とても残念な結果になったわけ。アメリカがキューバをそのままにしておき、カストロが初めに約束したようなやり方で社会主義が伸びていけば、面白い事になったと思います。(※7：1962年にキューバ危機が起こった。当時、米軍のキューバ侵攻をけん制するという名目で、ソ連が同国へ核ミサイルを密かに配備しつつあり、その事実を知った米国が海上封鎖などの実力行使でミサイル撤去を迫った事件。米ソ両大国が核戦争へ突入しかねない一触即発の応酬が続き、世界中を震撼させた)

カストロは初期演説の中で、いろんなタイプの社会主義の代表者を世界中から呼び寄せて、マルクス主義とはどうなのか、社会主義とはどうなのか、論述させるような会場を作ると言いました。山の中に立てこもって戦っていた時、山の辺りを大学町にして理想的教育をやるう、と考

えた。今までのソビエト的なマルクス主義は必ずしもいいものじゃないから、マルクス主義にはどういう理論があり得るのか、あらゆる流派の者に議論させると。

これは、負けて裁判にかけられた時に法廷で誓った、貧乏だった時からの約束です。荒唐無稽ですね。世界中のマルクス主義者を呼んで大会議を開き、中ソ論争を超えようと画策した方がはるかに現実的なやり方です。

だから当時の見方では、カストロの発言は「引かれ者の小唄」でしょう。だけど、やはり偉いですね。器量ありますよ。でも、そのカストロをもっとしても、アメリカにあら出られると、自衛上、考えが変わってしまうんです。

もし中南米に世界連邦を作る波が起こるとすれば、中ソとは違う、別のタイプの共産主義が生まれる可能性があるように思えます。南米人はイタリア人と同じように、暮らしを非常に楽しみます。派手な衣装着て、カーニバルなんかして、踊りまわったり。そんな暮らしに教条主義や官僚主義のやり方は入り込まないのではないだろうか。

集団における無手勝流

編集部 話は変わりますが、宗教などで聞く無手勝流というのは、個人ではなくて、集団の場合ではどうなるのでしょうか。鶴見先生、よくおっしゃっていますよね。

鶴見 そんなこと言うかな？ そりゃこちらの法主さんが無手勝流でしょう(笑)。

編集部 集団が無手勝流ではイカンのじゃないか、と言われたことがあったと思います。紫陽花はどうかでしょう。出たところ勝負の面は無手勝流のように見えますけど。

法主 集団の無手勝流という実際問題になると、
どういうんでしょうかね。

編集部 そもそも武芸で言う無手勝流って何でしょう
か？

法主 対手を意識してとらわれたら無手勝流とは
言えません。無念無想という心境でしょう。

だいたい言葉がまずいんです。勝つ、という言葉
が。本当なら、勝つとか負けるとか言うのはお
かしい。両方が救われなきゃいけないですから。

争いは起こっても、それによって両者が精神的
に深く結び付いて、結局は救われる。それが無手
勝流です。「勝流」という言葉を使うと、対手が
負けるとかあります。神ながらには、勝つとか
負けるとかはありません。だから、自分も生き、
相手も生きる、というのが一番いいですね。

編集部 出てきた問題に対して、行き当たりばつ
たりに、その時その時対処する方法が一つありま
すね。それを無手勝流と呼ぶとすれば、鶴見先生
が言われたもう一つの方法も大切じゃないです
か。プランを作り、いい意味での計画性を持ち合
わせてやっていくという。

法主 ちよっとその無手勝流というのがおかし
いんじゃないですか。

例えば集団生活でしたら、こういうことをしよ
う、といろいろな意見を皆が持ち寄る。その意見
通りになるとは限らないですけど。いちおう動く
方向が定まっても、決められた結論にとらわれて
しまったらケガすると思うんですよ。初めから決
めた通りキチンとしようと思っただけでいい。
瞬間瞬間にその時々を描いてゆくのが自然
の動きでしょう。ここ紫陽花はそういう動きを
していますね。現実の問題が出てきた時に、一方
的にどうするかすると強制するのじゃなく、話
し合い、皆が知恵を出し合って考えるんです。

まあ、塚原ト伝ぼくでんなどの無手勝流がどんなだった
か知りませんが、戦いを避ける場合が多かった
んじゃないですか。パツと立ち会った瞬間、対手
の腕が自分より上だなと思っただけで、サツと避ける
とか、それを見抜くのがやはり達人です。

争ったらお互いの傷付く場合には争わない。ああ
いう剣の世界に生きていたんですから、やらなきゃ
ならない場合もあったでしょうけど。本当の達人
は人を斬りませんね。それより自分から避ける
ことを考える。武芸者の無手勝流というのは、そ
ういうのじゃないですか。

有手勝流のすすめ

鶴見 良い意見の側につくやり方は、ある種の無
手勝流でしょう。山岸会の中にはそういう単純な
考えであると思えますね。対手の意見が良いと
思えば、その意見が自分の立場になる。それなら、
何が良い意見なのかをじっくり見定めればいい。
つまり負けがないんです。もし負けたら、違う意
見にまた乗り変えればいい(笑)。

ところがイデオロギー論争になると、マルクス
主義ならマルクス主義のある分派をどうしても守
らなきゃならないから、話がきつくなるんです。

きつい論争を超える場合、無手勝流でもいいけ
れど、主張を修正していくためには、あらかじめ
元になる考え、原案が必要なものもあるわけです。
しかも、最初の原案というのは、かなり緻密に作
っておかなきゃいけない。

自分の中に埋め込まれた一種の羅針盤の指すま
まに歩いていけば、目的地へ行ける場合もある。
ミツバチは初めから行き着くべき場所を体の中に
持っていますね。同じような能力は、多かれ少な
かれ、人間の中にもあるはずですよ。

だけど、そういうのは説明できない能力ですよ。
やってみせる人がいて、なるほどそういうものか
と納得し、その後を付いていくという形になる。
それは宗教的なんです。そういう宗教的な形じゃ
なしに、集団として行動する場合があります。

例えば、学問上の調査をする、家を建てる、金
を集める、役所との取り決めを結ぶ、いつまでに
何をやる、とか。こういう時は原案(計画)を立
てておかなきゃいけない。集団の行動を状況に
応じて良い方へ修正するためにも。

だから、山岸会の流儀では大きな計画を立てて
実行できないだろう、と感じます。つまり、集団
全体の研鑽けんけんつてないわけですから。後で修正する
にしても、巧みな修正を誘うような原案がなきゃ
いけません。

山岸巳代蔵氏(山岸会の創設者)は、自分の体
の中に大きな原案を持っていました。ところが、
巳代蔵氏の肉体が死滅すると、大きな原案を作る
人がいなくなってしまう。

大本の場合も同じだと思います。出口王仁三郎
は、明治、大正、昭和を生き抜き、戦争中に牢屋
へ入れられても動じない。戦後には、教団の再建
もできた。大きな原案を持っていたから。ところ
が教理はいいんですけど、その原案を作る人が
いなくなるとね。

つまり無手勝流には、美りのある場合と美りの
ない場合がある。そして無手勝流以外のやり方も
重要だろう。武芸者にしたって、無手勝流だけを
弟子に教えたはずがないと思います。基本的な剣
道の訓練はしたでしょう。それは無手勝流じゃな
い。有手勝流ですね。有手勝流を先に教え、その
後に無手勝流の境地を教え、ようやく初めて何か
つかめる……というふうな気がします。

(次号「最終回」に続く)

じんずうりきによせ

「神通力如是」の真意をさぐる 第十二回 大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文は昭和16年11月11日午前のものですが、「神通力如是」はこの年の12月8日まで続くので、まだほんの始まりの部分と言えるでしょう。今回も原文に次いで註釈を加え、そのあとに現代語訳を載せるという形式で続けたいと思います。

原文

十一月十一日 午前十時 於鳥見庄山

「倭姫、オンマエケガシタテマツル、イマシバシオユルシアレ」題目、神楽。

「大八洲嶋、秋津島根ノ、日ノ本ハ、吾ガ皇孫ノ地ナルゾカアシ。アーメデタヤナーメデタヤナー。大内山ノイロハエテ、吾ガ日ノ本ハ栄エユク、ワガ日ノ本ハ栄エユク」

「君方代ハ、千代ニ八千代ニ壽ギテ、幾千歳ノノチマデモ、代々、永久ニ栄エユク」

「吾レハ、大倭トビノモリ、奇稲田姫一。汝等、ヨク承ハレ、世界トハ我カ日ノ本ノ事ナリ。コノ日ノ本ニ於ケル大倭日高見国鶏ノモリ、八百萬ヨノ神等、集ヒ来

リ、真ノ妙法トナヘル時ゾキタリシゾ。汝等コレヲヨク承ハツテ、天津国民一人デモ真ノ正法、妙法トナヘル者ヲナシクレヨ。吾モトモニコノ妙法ヲ唱ヘマハラセル一。題目。

今、我日ノ本ハ閻ナルゾ。コノ閻ヲオシ開キシノ妙法——立テル日、吾レトモニ世ニ出シ。皆ノ者、コノ旨ヨクヨクムネニ體セヨ。真ノ題目トナヘアレ。コノ吾ヨリヨク頼ミマスル。吾モトモニ唱ヘンコノ妙法、『ミヤウーホウ』ト云フモノハ神デモ佛デモ何デモナイ、宇宙ノ大真理。コノ正法ガ立タレンガ為、我ガ日ノ本ハ閻ナルゾ。①天萬乘大君ハミ心ナヤマシ玉フゾヨ。汝等、国民ト生レキテ皇孫ノ為、我日本ノ為、真ノ妙法トナヘクレヨ。其時ハ我カ日本ハ世界第一ノ国トナリ、諸天善神、歡喜シテ、少サキ草木ニ至ルマデ、ミナ妙法トナヘルゾヨ。ミナミナヨクヨク之ノ事ヲムネニ體シ、真ノ妙法ヒマアル時ハ唱ヘカシ。

倭姫、日々御苦勞、神楽ソウシクレイ。妙法題目トナヘ、神楽ソウシクレ

ヨ。吾レトモニ妙法ヲトナヘクレルデアロウ」

実相 奇稲田姫命、座より立ち玉ひ、合掌せる御手をさし延べ玉ひてお題目を唱え玉ふ。次で建速素戔嗚命御出現になり玉ふ。

註釈

①大内山（おおうちやま）

（一）京都市右京区にある仁和寺の北の山。宇多天皇の離宮があった。御室山。

（二）（一）から転じて、上皇の御所をいうようになり、さらに宮中をさすようになった。皇居。禁中。（小学館『日本国語大辞典』による）

②天萬乘（いてんばんじょう）

「乗」は古代中国で兵車を数える語。天子の直轄領は、兵車一万両を出す広さとされていたところから、天下を治める天子の位。天子。一天萬乗の君。（小学館『日本国語大辞典』による）

③少サキ草木ニ至ルマデ

地上に生きる小さな草木までも諸天善神と共に歡喜してみな妙法を唱えるという。これは善神の喜びの気持ちを比喩的に表現しているものではなく、真実だと思う。

▼そう思った根拠をここに書いておきたい。

法王さんご帰幽後のある夏の紫陽花邑大掃除の日のことだった。夕方近く邑の若者らと西齋

庭で仕事じまいにかりかけた頃、日元さんの孫娘が「おじちゃん(私のこと) 東山坊さんと呼んでよ」と言ってくる。

この霊界人さんは大倭病院の守護霊として病院横の小高い所にお祀りされてあった。私は近くのみんなに声をかけて一緒にそのお社にむかい全員でご挨拶した。東山坊さんは先ず皆に、お社の前を綺麗に掃除してもらったことに對してお礼を申された。続いて「今日皆は草刈りをしてはいたが、この中に刈られた草の命まで考えた者はいるか?」と言われた。全員一言もなし。少サキ草木にも心があり、妙法の中にあることを改めて思い出させられたのです。(杉本談)

(現代語訳)

11月11日 午前10時 於鳥見庄山

法主の座にむかい妙月神憑りして「私倭姫、おん前を汚しますがしばらくの間お許しください」題目、神楽。

「多くの島々によって出来ている日本列島、秋津島根という日本は我が皇孫の地であります。これはとても有り難くうれいことです。皇居は光映えて美しく、われらの日本はこれからも栄えていくでしょう。」

スメラミコトの世は非常に長い年月、何千年もの間もずっと栄えていくでしょう」

「私は大倭魂の森にいる、奇稲田姫である。ここにいてあなた達、よくお聞きなさい。世界とは日本のことである。」

この日本にある大倭日高見国の鶏の森にいた皆さんの霊人達が集合して真の妙法を唱えるべき時期がきましたよ。

あなた達よ、よくお聞きになって、顕幽にわた

る国民の一人でも、真の正法、妙法を唱える者よ、世に出てきてください。

私自身も共にこの妙法を唱え申しますぞ、題目。今日本は闇の世界にあります。この闇を押し開いて、真の妙法の存在を世に示す日。私も共に現界に出て行きます。

今ここに居る皆の者よ、この言わんとするところを、よくよく心に留めておきなさい。真の妙法を唱えなさい。この私からくれぐれも頼みます。

私も共に唱えるこの妙法『ミヤウーホー』というものは、神でも仏でも何でもない、宇宙の大真理。この宇宙の大真理が世に行き渡っていないために今の日本は闇の存在になっていきます。

今、天皇(スメラミコト)はこの闇の日本に心悩ましておられます。あなた達は日本国民として生まれてきたのだから、皇孫のため、我等日本のため、日本を闇にしている悪魔退散のために真の妙法を唱えてください。

それが実現できた時、我が日本は宇宙の大真理を世に出す世界で最初の国となり、大倭の霊界にある霊人達が歓喜して、小さな草木に至るまで、みんなが妙法を唱えるでしょう。

皆よ、この意味を理解して、暇あるときは真の妙法を唱えてください。

倭姫よ、日々ご苦労さま、神楽を奏しておくれ、妙法題目を唱える神楽を奏しておくれ。

私も共に妙法を唱えることとしよう」

実相 奇稲田姫命、座から立ち上がった合掌した手を差し伸べられて題目を唱えられた。次いで素戔嗚命がご出現(妙月に憑依)になった。

(読者の皆さんへ)

今回の内容について読み終えられた皆様にも様々な疑問がおりかもしれません。

「三人の会」としても各人が今回の内容に関して何らかのタタキ台ともなる解説を試みようとなりましたが、話し合いの結果、今回それは取り止めることとし、単に素材(原文)に関する簡単な註釈と現代語訳だけを載せるにとどめました。

私共の解説が皆様に何らかの先入観を与えてはいけなないと考えたからです。今後ともこの「神通力如是」の内容に関する自由で活発な議論が行われる事を望んでおります。

【だま】と【だま】(2021・3・10)

味の世界と神ながら 大阪市 金澤 秀光
大倭に出入りし始めた頃、鈴月かあさんに「いっぺん、食うてみっ」と言われたことを思い出しました。「食うて、何をどうやって食うねんやろ?」と、意味も分からないままでしたが、ようやくこの歳になって何となく分かりかけてきたかな?といった感じがしています。

昨年からうちの(鍼灸の)治療所のメンバーと年に1度ご参拝させていただいてるのですが、副院長の妻が初めて大倭神宮にお参りした時、不思議なことに素っ裸になったような気がしたと申しておりました。僕はスタツフに、大倭のことはあまり話してません。第一僕自身ははつきりと分かってないのですから。でもまずは触れて感じて、そこから各個人の感性にゆだねるのが良いと思ってるからです。ご利益は無いと言われますがそのようなことは無いと思っております。人生に何があっても起こっても、この世の目前の現実には極楽浄土があると気づかせてもらう道を指し示してくれる、感じ取らせていただく所だと勝手に思っております。かつては友人と訪れてましたが、最近では家族4人で、またスタツフみんなでお参りできるのが、なんやしらん、うれしいのです。

念仏と、題目と、大倭

万教
帰一

大倉(旧姓米澤)有宏

万教帰一。「念仏でも題目でもなんでもいいから」とは法主の法話にもよく出てくる話である。

今日ここに寄稿する私は浄土宗僧侶であり、生まれるその前からここ大倭に出入りし、小さい頃からすでに「法主様と釈尊とキリストとは絶対に正しく、またそれらは究極的には全て同じ真実を説いている」と思っていた。時は進み、私も世間に染まり、右記のことは心の奥底に常に秘めながらも、ある程度宗教とは距離を置いて、世間に随って成長してきた。しかし、結局は人生や世界について深く思慮する道に入ってしまった、今や(経緯は残念ながら省略するが)浄土宗僧侶として無事修行を満行してしまった。そんな私から、この場を借りて、少し念仏と題目と大倭について思うところを人目に晒してみたい。

大倭といえは「奈母太加天腹」。浄土宗僧侶などになつて「南無阿弥陀仏」と何万遍称えるよりも前から、幼少期より何の疑問もなく唱えてきた言霊である。法主の教えは、一見煩雑で、その説くところを整理して取り出してみたいような形跡は感じられないし、また法主自身そのようなことは他の人がすることであると何度か口にされているような感じがするから、代わりに恐れ多くも私が大雑把に整理すると、①日本神話の誤りを訂正するという民族宗教的な一面、②世界の成り立ちや仕組み、その行く末についての世界宗教的な一面とに二別出来るように感じる。その説くところが煩雑に見えるのはこの両者が不可分な一体である

ことにあり、どこからが民族宗教でどこからが世界宗教かという境目が端から存在しないことによる。

そして言霊として「奈母太加天腹」が示されるのであるが、実際には「念仏でも題目でもいい(キリスト教でもいい)」と言われたり、「神通力如是」を見ても題目が多く示されていたり、登場する熊谷直実などは浄土宗法然主要の弟子で念仏を多く申したことで知られる人物であるなど、普通に読めばただただ混乱させられるばかりである。

そこで私は、万教帰一の確信の上から、長らく万教を統合する視点を言葉にして示すべく、考え(「神に還つ」てきたのであるが、最近『やわらぎの黙示』にこんな文章を見つけた。《思えば外典から内典へ、小乗から大乘へ、権教から実教へ、迹門から本門への流れの如しと日蓮ならば語られるところであろう。これに加えて私は仏教から神ながらへと言いたいのである。》(P102)。「題目が究極の教えであるならば初めからそう説けばいいし、大倭の教えが究極であるならば初めからそう説けばいいではないか」という疑問を、皆様の中にも抱いたことのある方は少なからずいることかと勝手に思うのであるが、この一文はそうした疑問にも答えてくれているのである。そこで、この一文を頼りに、私の理解する所を、一部分であるが示す。

地球に大地と大海があるように、霊界にも大地と大海のような関係がある。すなわち霊界の大地とは自然神、大海とは固有霊である。法主の示す「ひのひじり」とは大地の霊、大御親ともいうべき存在であり、仏教でいうところの密教では大日如来(あまねく照らす本霊)、浄土教では阿弥陀仏(インドの言葉で単に、無限の光明、無限の寿命という意味)であり、霊界の無限の大地である。

大地に雨降って河川大海を形成するが如く、はじめ地にしみて地中にあり、次いで湧きて、そのエネルギーはわずかは横方向へ止み、多くは縦方向へ流れ川を形成するが如く、この横方向が寂滅である仏の相、縦に生育栄えゆくのが神の相。上流から中流、下流へと、それに応じて岸辺の在り様は異なるが如く、仏としての教えや姿は多様に示される。時代下るにつれ下流につれ流れ弱まるが如く悟る力弱まり、そこで示される仏教が大地たる阿弥陀仏がむき出しで、他力を示しているのが念仏の教えである。

「地中から地表へ、上流から中流、下流へ、そして大海へ」と変移するが如く、「無宗教(もしくはアニミズム)から神(生育)へ、同時に仏(滅)横)あつて、原始仏教から小乗、大乘へ。そして究竟して浄土門。そして最終には岸辺(「仏教」なき法滅へ)と変移するシナリオ。この大地が現界に変化されたものが釈尊であり、この娑婆がそのまま浄土であるとされる寂光土であり、そこにおいて対応する言霊は題目であるが、河川が大海に流れ出てその岸辺を失うが如く、この巧妙に仕組まれたシナリオにおけるこの世界は仏教の世界からものと大海すなわち神(かみ)もとの)ながらの世界として表出する。

物理にしても数学にしても時代が進むにつれ真実が埋められるが如く、宗教においても真実は時代が進むにつれ明らかになる。そうして聖者が度々出現し、このシナリオを進める。

与えられた文字数の都合上、かなり省略して示さざるを得なかったため、普通に読んでこの真意をさらりと理解することは難しいかもしれないが、数度読み込んで咀嚼しようと思えば、その行間を埋めることができると思信じて、この寄稿を終える。

あじさい日誌

大倭安宿苑では
2月25日 来年度入職予定の新卒学生に対する事前研修。

(菅原園)
2月14日 映画サークル。「漫画日本昔ばなし」に参加10名。

(須加宮寮)
2月23日 近隣の出口商店まで歩いて、おやつを購入。
(長曾根寮)
2月21日(特養) 折紙等でひな祭りの飾り付け準備。
2月22日(デイ) おひな様の壁掛け作りをしました。

2月9日 ご帰幽二十五年の法主帰幽祭が行われました。午後1時40分、奥津城でご挨拶、2時から拜殿で祭典。この日の法話は昭和62年12月23日の旧拜殿での降誕祭をDVDで映像と共に。昭和63年1月号『おおよまと』9〜11頁に「生かされてあること」として掲載分。
2月15日 大倭神宮月次祭。
2月23日 午後1時30分大倭神宮において申孝祭、紫陽花邑に戻って2時から拜殿で月次祭が行われました。この日は昭和42年2月23日の、「大和」の地に平和が来たことを感謝して、神武天皇が大倭神宮の祖霊にお参りされたことを記念するお祭だという法話でした。(本紙未掲載)

2月25日 教務本庁で午後1時から本紙編集会議。今回、大倉姓に変わったという有宏さんが遊びに来てくれました。
3月5日 大怪我をして入院中だった高橋良美さんが退院。午前11時頃、約百日振りに紫陽花邑に帰ってこられました。
3月6日 大倭神宮月次祭。

岸田哲さんの車で高橋良美さんも参拝。京都の木津から清水さんという男性が祭典日と知らずに来ておられました。
夜6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

見田暎子さん追悼文集『旅するように生きて』によせて

◆東京都 木村聖哉

『旅するように生きて』拝読しました。大変充実した追悼文集で、読み応えがありました。暎子さんは昭和15年4月生まれで、私は5月生まれなので全く同じ時代(社会)を生きてきたんだなあと思いました。『積極的』『行動的』『な女性だったんですね。暎子さんの文章の中では「生きていくかたち」「法

主さんとはば」が心に残りました。死に方も見事でしたね。暎子さんが秩父事件の井上伝蔵に深い関心を持っておられたことを知りました。私も40年くらい前に上野の本牧亭で白土吾夫(しらとのりお、日中文化交流協会専務理事)さんが語られた「秩父事件・井上伝蔵」を聞き、深く感動しました。特に死に際に妻子に自分の身の上を初めて告白したという件です。それを思い出し、暎子さんと話したかったと思いました。

(2021・2・21)
◆東京都 高橋理砂
大倭のご縁で見田さんの教えをいただいたり、今も良美さんと連絡できたり、あたたかなご縁を嬉しく思っています。『おおよまと』は、実家に長くお届けいただいています。
20代の学生の頃は、平将門つながりで得田(壽)さんにも仲良くしていただき、得田さんが町田の辺りにおられたからか、よく喫茶店に連れて行っていたのだなことを覚えていています。
平将門側の得田さんに対し、私の先祖は討伐側・俵藤太ですので、面白くない縁だったなと思っ
ています。ご縁が途絶えてしまいましたが、得田さんのお話は面白かったな、と、今もぼんやり思い出します。ちなみに現代でも我が家は神田明神も首塚も行ってはいけないうこと

になっております。
法主さんは大学の先輩にあたることもあって、学生時代、古代史の研究分野は史料がほぼありませんから行き詰まることが多くて、そつと問いかけたことが史料では当たり得ないことばかりだった記憶があります。学生でなくなってみれば、そんなことはどうでもいいことだったのですが、視野の狭い若輩者に、法主さんもあさんも、優しくしてくださいました。ありがとうございました。

法主さんのお葬式にも父と伺いました。記念にいただいたお人形は大切にしています。
コロナで東京者がウロウロしにくいですが、往來してもご迷惑ではなくなら、ぜひご挨拶に伺わせてください。
(2021・2・28)

編集後記

▼「神通力如是」も12回を数えた。三人の会として試行錯誤を重ねてきた2年間だった。

本文に登場する「南無妙法蓮華経」の題目は、言うまでもなく日蓮上人が唱えられたものだが、その上人の「立正安国」というお言葉は、正しい教えが一人一人の生き方となれば、国を安んじる事が出来るという意味であるという。今号のイナダヒメの思いもこの事であろう。何とも慕わしい願いである。(修)

あんない

*月次祭(大倭神宮)
4月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*須佐緒祭(大本宮)
4月8日(木) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。恒例の園遊会は中止とします。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催祝会
4月11日(日) 中止とします。

*箭負祭(大倭神宮)
4月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の霊威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

*鈴月かあさん20年帰幽祭
4月19日(月) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて

*月次祭(大本宮)
4月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

*引き続き今月もコロナ予防のため密集・密接を避けるようにご配慮・ご協力のほど、よろしくお願いたします。